



忘れ物は戻ってくる

作 池田真哉

目次

～ 鉄道三話 ～	1
～ 平和 ～	10
～ 目的地 ～	12
～ 金儲け ～	14
～ 足るを知る ～	17
～ 人生と善 ～	20

～ 鉄道三話 ～

郵便受けに無造作に大きな茶封筒が入れられていた。個人経営の通販ショップからのものと一瞬思ったが、封筒の裏面には区民まつり実行委員会からとある。

表面には私の宛名と住所が書かれている以外にはロゴも飾りもなにもない。今年はコロナ禍が明け3年ぶりに区民まつりが開催された。久しぶりに人が集まりまつりの高揚感に触れてとても楽しかった。2か月前の話だ。盆踊りが開催されて人々は踊り興じていた。その傍らで家族と友人らでビールを飲みながら談笑していた。

郵便受けから取り出した少し大きいサイズの茶封筒を手を持ちながらエレベーターに乗った。はて、区民まつり実行委員会からなんの贈りものかな？ 思い当たるふしはない。しかも2か月ほどもたっている。忘れ物？ 区民まつりへ行ったときに、なにかを落としたのかもしれない。それが今のタイミングで私のところへ送られてきた。やはり、日本人の多くは善人で社会システムが素晴らしい。盗もうとする人など数少ない。この国に生まれてほんとうによかった。海外の方もこの日本の忘れ物が戻る状況を驚くべきこととして伝えている。

私も数々忘れ物をしてきた。ところが、そのほとんどが戻ってきている。自分でも奇跡的なことだと思う。大都市の鉄道では「ひと雨500本」といわれるほどで多くの傘が遺失物として届けられる。みんなよく忘れる。落とした人が取りに来ないことも多く、それらは「落とし物市」に出品される。大きな施設でもそうだし小さな飲食店でも大概遺失物を預かってきている。道端で落としても警察で預かることもある。心ある人が拾って、盗むことなく交番に届け出てくれるからである。自分も今までどれだけ助けられたことかとみなさんの善意に打ち震えてしまう。やばかった忘れ物を思い出してしまった。

会社の上司と用事を済ませた後、帰途につき水戸駅から電車に乗ろうとしたときのことである。品川駅行の特急券を買おうと券売機前の十数歩手前で、上司に「次の特急は何時発だった？」とおもむろに訊かれたので、個人携帯を取り出して yahoo Japan の路線情報検索で立ち止まって調べた。時間を伝えて、そのまま乗車券と特急券は券売機でクレジットカードを使って購入した。上司は役員でもあったので自分はグリーン車に乗ると言って別々で帰った。帰りの特急は、仕事がたまっていたこともあり、会社携帯のモバイルデータ通信で会社PCをネットに接続させて仕事をしながら帰ってきた。品川の自宅へと着いて、今日の出張は、役所で業務の会話をしてきて必要な仕事ではあるが、楽な部類の仕事であった。ひと風呂浴びてビールを飲もうと思い、自分の個人携帯を見

ようと思い会社カバンの中をごそそと探してみた。会社携帯はあるが個人携帯が見当たらない。もう一度ごそそ探してみてもどこにもない。個人携帯がない！一瞬で血の気が引き、携帯がなくなった場合の後の面倒な処理のことを思い巡らせて、心拍数が増える。どこで落としたか、見当がつかない。役所を出た時は確かにあった。タクシーに乗っているときはどうだろうか。特急の中では会社携帯は使っていたが個人携帯は見えていない。品川駅降りてからも使った覚えもない。どこだ？どこで落とした？携帯会社に通信ストップをして、支払い関連アプリのサービスも使用中止の連絡を入れなければならない。面倒だ。ああ、面倒だ。携帯が出てくるまで、携帯なしの生活を送れるか可能かどうかわからない。代替機種を借りられる？いろいろと思い巡らす。ほぼパニックになりながら、可能性のあるところに連絡を入れてみようと思い、役所から乗車したタクシー会社に連絡を入れることにした。

「もしもし、13時から14時頃に県庁から水戸駅まで乗車したのですが、携帯を落としたかもしれないのですが、落とし物で届いてないでしょうか？」

「ちょっと待っていてください」と言ってしばらくの間待たされた。

あまりにも時間がかかっているの、ないならいいからと思っていると、もしかしたら、水戸駅で落としたかもしれないとひとつの可能性に思い至った。そして、連鎖的に券売機の横においたかもしれないとおぼろげながらの不確かな記憶が舞い戻ってきた。

そこかもしれない。置いたような気がしてきた。そう思った。

「大変、お待たせしました。ちょっと、その頃、出ている運転手に確認していたのですが、ないようでしたね。もし、なんらか出てきましたら、また、こちらから電話します」と回答が返っていた。

心の中は、水戸駅の遺失物係へ連絡したいという思いでいっぱいであったので、

「わかりました。お願いします」

と言って携帯を切り、水戸駅の電話番号を検索して、すぐに掛け直した。

「もしもし、14時台の品川行の特急に乗車したのですが、携帯を落としたようで困っているのですが、落とし物として届いてないでしょうか？」

「ちょっと前にね。届いているものがあるんですが、どんな特徴のものですか？」

「青色のカバーの携帯です。手のひらぐらいの大きさと少し長めのサイズ」

「ああ、これだね。多分これですよ。あと、どのへんで落としたとか覚えていますか？」

「たぶん、券売機の横とかかもしれません」

「そのあたりに落ちていたそうです。わかりました。預かっていますので、引き取りに来てください」

「郵送で送るとかできないですか」

「郵送はできませんね」

「わかりました。明日もそちら方面に行く予定があるので、水戸駅に寄って取りに伺います」

「そうしてくれますか」

身体の力が抜けていくのがわかった。まだ、鼓動は早く打ち続けている。ひとまずよかった。駅で預かっていてくれていて本当によかった。誰か届けてくれたのであろうか。

駅員さんが見つけたのであろうか。とにかく見つかって本当によかった。それにしても上司がタイミングわるく券売機で買う直前に特急の時間を訊くから、いつもとらない行動をとって、しかも、なにかずっと他の電車が何時に発車するのか、掲示板を眺めながら、しばらくになにか話したようにも覚えており、たぶん券売機を買うときにも話をしながら買ったような気がしていた。そのときに、ふと横に置いてしまったのだらうと思った。半ば上司に八つ当たりしたい気分が駆られていた。券売機を操作すれば、何時に来るかすぐにわかるのに、変なタイミングで訊くから忘れてしまったんだと。人のせいにして自分がいるのだが、まあ、ちゃんと出てきたのだからよかったと自分を諷めつつ安心した。ほっとした。1件落着であった。

その時期、忘れ物が続いていて、こんなこともあった。

まだ子供が小さく抱っこ紐をしていた頃である。妻の産休が明けて1年ほどたち、超絶忙しくなってきたおり、土曜日と日曜日の週末も出勤という時であった。自分ひとりで家の中で面倒を見るのも、子供も小さく手間もかかるため、柏の実家に帰ることにした。1泊するので自分の着替え、子供の着替え、子供のおむつや濡れティッシュ、ビニール袋など荷物を両手持ち。娘は抱っこ紐でぶら下がっている格好。ベビーカーでもよかったが、その時は抱っこ紐を選んだ。品川から直通の常磐線に乗ればよかったが、乗車時間のタイミングにより、上野駅乗り換えの列車に乗り込んだ。娘は抱っこ紐で両手に荷物。優先シートに座るやいなや、寝ている子の重さから解放されたくて、抱っこ紐を外し、娘を座らせて、大きな荷物はすばやく上部の荷棚に乗せた。人もまばらでシートに余裕があったので、娘の頭を自分の太ももに乗せて横に寝かせた。電車は発車した。

ことんことんという列車の走行音と心地よい振動が続いた。寝汗をかいている娘の頭からあたたかな体温が太ももに伝わり、自分までほんわりとしてきて、次第に、電車の振動とともに眠たくなってきてしまった。うつらうつらしている。寝たり覚めたり。北千住に停まった。あっ、松戸に停まった。ことんことん。ことんことん。ふと目が覚めると、ずっと寝ているような気がした。しまった。窓の外を見ると、駅に停まるタイミングだったようで減速している。この車窓から判断するに、もうすぐ我孫子駅だ。まずい、おりなきゃ！

すぐさま車内アナウンスが聞こえてきた。

「我孫子に到着します。揺れにご注意ください」

寝ている娘の向こう側の小さなカバンをとり、娘は抱っこ紐につける余裕はないと判断して抱きかかえて、すぐさま降りる準備をした。列車は駅に停車して扉が開いた。カバンと娘を抱きかかえるようにして、開いた扉から飛び降りた。ふー、あぶなかった。寝過ぎすところであった。でも、気づいてよかった。プラットホームのベンチに娘をいったんおいて、抱っこ紐に付けて、階段を上って改札に向かおうとしたところ、なんか、ないような気がする。なんかない。ああ、なんかない。大きいなカバンがない。カバンがないよ。列車は、扉も締まりゆっくりと動き出して出発してしまっていた。あーあ、忘れた！ 大きなカバンを忘れてしまった。自己嫌悪。ああ、どうする。どうする。どう

する。しばらくプラットホームの天井を仰ぎ見て。次の行動を考えた。そのまま、階段を上って改札にいる駅員さんに荷物を忘れた旨はなしたら、4番ホームプラットフォームにある駅長室へ行ってくれと伝えられた。そのまま、階段を下りて駅長室の扉をとんとんと叩くと、なかから、駅員さんが出てきた。

「今、出発した成田行の快速電車に、荷物を荷棚に忘れてしまいました。探す方法がありますでしょうか」

「成田までの途中の駅で探すことはないですね。終点の成田駅で着いたら駅員が忘れ物のチェックをするので、それまで確認できないですね」

「成田駅で、もし見つければ、郵送かなにかで送ってもらうことはできますか」

「いや、郵送はできません。成田駅まで取りに行ってもらうことになります」

「そうですか」

「成田駅に着くまで30分以上あるから、今、電話して、荷棚に落とし物があるかどうか駅員には伝えておきます。それで結果を電話でお伝えします」

荷物の特徴を伝えて、いったんここを離れて、電話を待つことを伝えた。改札に向かっている途中で、父親から電話がかかってきた。

「今、駅前にいる。今、どこにおるんだ」

「もう、我孫子駅についている。これからそっちに向かうよ」

「なかなか出てこないから、どうしたんかと思って。じゃあ、待っているよ」

改札を出て、通路を渡って駅前広場へ降りて、父親が乗っている車を見つけた。車に乗り込んで、孫を見た父親は笑顔で喜んでいて。忘れ物をした経緯を話した。

「子供を忘れんでよかったな」

「まあ、そのとおりだけど。ははは。笑うしかないね。成田駅にあれば、取りにいかないといけなくて、電話待ち」

「とにかく、お母さんが家で待っているから、一回、家に帰って、電話を待って、あれば、それから取りに行けばいい」

実家につくと、息子と孫が帰ってきて、笑顔の母親が出迎えてくれた。

「おっちょこちょいね。あんたは。子供を忘れないでよかったわ」

父親と同じことを言う。それから、しばらくして、駅員から電話があった。ちゃんと、成田駅に到着した電話に忘れ物があったとのことであった。忘れ物は戻ってくる。ちゃんと戻ってくる。それを聞いて、娘は実家において、父親に駅まで車でまた我孫子駅まで送ってもらった。そして30分以上かけて人もまばらな成田線の電車に乗って成田駅に着いた。ちゃんと忘れものがあった。とんぼ返りで30分以上かけて電車に揺られながら戻り我孫子駅で降車して、迎えてきてくれた父親の車にのって、ようやく実家に帰ることができた。

あともうひとつ、生きた心地がしなかった忘れ物の話もある。

息子が成城学園駅近くの病院にかかっており、通常は渋谷駅から都バスに乗って1時間ほどかけていくのであるが、その時は新宿経由で小田急線に乗って、成城学園前駅で降りていくルートであった。上の娘も連れて家族4人でその病院へ向かっており、成城

学園前駅で降りた。電車の中では、私の横に娘がいて、娘の隣に息子を膝にのせて妻が座っていた。成城学園前駅で電車の扉が開き、ホームに降りて、階段を上り、改札近くで、Suicaを取り出そうとカバンと思ったが、カバンがない！ えっ！ 肩からたすき掛けにしてかけていたカバンがない。カバンの中には、財布、携帯、クレジットカードが入っている。財布の中には運転免許証や保険証、銀行カードに、ポイントカード、通院カード、ありとあらゆるカードがたくさん詰まっている。それら一切合切がない。肩からかかっているべきものが空虚にもないもない。血の気がなくなり、立ち眩みが少しした。

「カバンどうした？ ないよ」

妻にそう訊いた。なんか、人のせいにしている言い方。

「ないよって、私知らないよ。ずっと、持っていたじゃない」

「ないんだよ」

妻は、え、え、え、えーとって、左右を見渡し、後ずさりして驚きを隠せない表情。

「ないんだよ」

「全部、入ってんでしょ。大事なもの。ないって。電車の中に置いてきた？」

「電車では持っていたはずなんだけど。。。」

どこかで置き忘れたかを記憶をさかのぼって思い出そうとした。どこかに置いたような記憶は戻ってこない。

「携帯とか、まずは止めなよ。銀行とか」

妻は動揺しながら、私に言うが、私も動揺している。

「まずは、駅員さんに失くしたことを言っておこう。もしかしたら、電車の中に置いてきたのかもしれない」

私は改札まで歩いていき、窓口から駅員さんに話しかけた。

「今、出発した電車に、財布や携帯が入ったカバンを置き忘れたかもしれません。この先のどこかの駅で調べてもらえないでしょうか」

駅員は「お待ちください。確認します」といい室内の奥のほうへ行った。

しばらくすると、別の駅員が出てきた。遺失物取得係の担当のようであった。

どんなタイプのカバンかとか、何両目の車両に座っていたのか何点か質問を受けた。答え終わると、また、駅員は奥へ引っ込んでしまった。しばらくすると戻ってきた。

「登戸駅で確認することができるので、電車が到着したところで調べてもらうことにしました。電話番号を教えてください。確認後に、また、電話します」

私は、妻の携帯番号を教えて、お礼を言って、改札から少し離れているところに立っている妻と、娘と、息子のところへ駆け寄った。

「なんか、調べてもらえるみたい」

一縷の望みにかけた。調べてもらえる先があっただけでも、少し心は落ち着いた。だがなかったら終わりだ。すべてのカードを停止するために電話をかけまくらなければならない。でも、携帯もなければカードそのものもなにもない。カード番号も連絡先もわからない。1個もわかりやしない。それもどこかで調べて、1つ1つ対応していくしかない。めまいがしてきた。

「電車の中に置いてきたの？ ずっと持っていた気がしたんだけど」妻は言う。

「ああ、持っていたはずだけど」

その瞬間、娘と自分との間に、肩から掛けていたカバンを置いたような気がしてきた。いや、でも、確かな記憶でもない。娘にそのことを訊いてみると、あったかどうか分からないという。でも、そこしか考えられない気がしてくる。

「とりあえず、待ってみよう。でも、病院の予約の時間がきちゃうかも」

「じゃあ、病院へ先にみんなで行って、そのうち電話が来るから、あとから取りに行くようにしようか」

「あったらね。あればいいけど。でも、その間中、気が気じゃないでしょ。登戸であれば、そんなに時間かからないと思うから、まだ、間に合うから、一緒に待ってよう。私も気が気じゃない」

「そうだね。もうちょっと、待ってみよう」

非常に長い時間のように思われた。登戸に着く時間を検索して、その時間に近づいている。

家族4人、改札近くで待っているしかなかった。

そういう時にでも上の娘は、まだまだ遊びたい盛りで鬼ごっこをしようと私を誘う。追いかけていたりしていると、少し緊張もほどけてくる。もうそろそろ、到着した頃かなと思ひ、改札に近寄ったところ、妻の携帯が鳴った。落とし物を調べた結果の連絡のほうであるので、そのまま改札に進み、窓口顔を出したところ、遺失物係の方と目があつた。ああ、と遺失物係は私を見て言った。

「登戸駅の駅員に調べてもらったところあつたようです。登戸駅まで取りに行ってください」

「ああ、よかった。ありましたか。ああ、ほんと、よかったです。本当にありがとうございます」

私は、ひとり旅に出たカバンを迎えに行くことにした。妻にあつたことを伝えると、

「もー、本当に私のほうが、ドキドキしたわよ」

と安堵と若干の怒りとがミックスした音色になった。

「あつたからよかったね。私は病院に行くよ」

「ああ、僕は登戸に取りに行く」

妻は改札を出て、私は駅のホームへ降りてベンチに腰かけて座った。

「ああ、本当にあつてよかった」一息ついた。

登戸駅に着くと、改札にいた駅員が私を待っていたようで、窓口から顔を出すと、すぐに私の遺失物を手渡してくれた。駅員もよかったですよ一言だけ言うだけで、さも、当たり前のようにして接する。身体の中から喜びのエネルギーが沸き上がる気がした。忘れ物が戻ってきたということもそうであるし、みなさんの善意に触れたからでもあつた。安堵の波がさーっと押し寄せていた。

これらの成功体験から、なんか変な自信がついているようで、落としたものは必ず帰ってくるという感覚がある。3つとも鉄道に関連して忘れ物のできごとであるが、成功体験はこれだけでなく、人生の中で、他にもちょこちょこある。居酒屋に眼鏡を忘れていたことに帰る途中で思い出して、店に戻ったところ、落とし物として預かってもらえて

いたこと。喫茶店のテーブルに財布を忘れたことに気がついて戻ったところ、ちゃんと財布を預かってもらっていたこと。遊園地で携帯を落としたことに自宅に戻ってから気づいて、電話連絡したところ遺失物として届けられており郵送で送ってもらえた。信じられないようなこと、奇跡的なことを私の人生の中でちょこちょこ起こっている。でも、それは心の中でひそかに思っているだけで、いつも意識しているわけではない。

だいたい落としたり忘れたりするようなことは起こってほしくないわけであって、起こってもそれが必ず戻ってくると思えるわけでもないのに、忘れ物が戻ってくる自信という表現も違うのかもしれない。社会全体への信頼というのか、善意というののに対しての自信なのかもしれないし、もっといい表現は別にあるような気がする。忘れ物は戻ってきてほしいし、忘れ物はきっと戻ってくる。

私は郵便受けから取り出した少し大きめの茶封筒の上部をはさみで切り、中身を取り出した。もしかしたら、忘れ物かもしれないと考えて、恐る恐る中のものを見た。そうすると、出てきたものは区民祭り懸賞クロスワードパズル当選通知と書いた紙であった。クロスワードパズル？ 思い出すまでに数秒かかった。2か月ほど前に確かに区報のおまけの枠みたいところにクロスワードパズルがあって問題を解いたのを思い出した。クロスワードパズルの横にQRコードがあってそのリンク先のwebページに回答を記載して送信したのだった。なるほど、なるほどと思って、中身を見てみると、区にある有名な公共建築物をかたどったバッジが2つと、季節外れのうちわ、区のマーク付きの筆記用具セットが入っていた。当たったことそのものより、忘れずにちゃんと抽選して当選者に景品を贈っている律義さのほうに感心したというか、喜ばしく思えた。当たり前と言ったら当たり前で、そうするのが当然ではあるが、出したのも忘れてしまった懸賞に対してちゃんと当ててもらって、結果が帰ってきたことに不思議と驚きを覚えた。私の中ですでに忘れ物となってしまうものが戻ってきたのである。しかも当選！ という響きとともに。ただのおっちょこちょいの忘れんぼが、秘密裡になぜか救われて結果喜んでいるという始末である。

人に話をすれば、だいじょうぶかなこの人とは思われて信頼を損ねてしまうようなことをしてかしているにもかかわらず、大事に至ることなくギリギリのところまで人々の善意に助けられるのである。この日本のシステムは素晴らしい。この世の中、捨てたもんじゃないよと何度も言われているような気がした。

世の中の欠陥に目を向けて、そこをどんどん改善してよくしていくことは重要なことだと思うけど、欠陥ばかり見ているのは、世の中、欠陥だらけに見えて絶望的になってくるので、そういうときは善意に目を向けるべきだと思う。欠陥ばかり習慣的に見る人が、いきなり善意を見ろと言ってもそうそうできることではない。その場合には、歩くスピードを遅くするとか、力を抜くとか、失敗して誰かに助けてもらうとか、そういうきっかけがないと難しいかもしれない。ふわっとあったかく幸せを感じる瞬間というものもあると思う。思わぬところで、そういった話に遭遇することもある。

子供が小学校にあがり自宅から学校に無事に行けるものなのか心配して付き添って学校へ向かっているときに横断歩道では、警察官が、小学生が飛び出さないように赤になったら止まれるポーズで青にあったら渡れの誘導をしているところを見て、なんてすばらしい社会システムなんだと感動してしまったことがある。子供たちが安全に渡れるように笑顔で見守ってくれている。確かに毎年のものでよくある風景なのだが、自分の子が小学生になって自分ひとりで学校へいけるかどうかと心配している親にとっては、涙も出んばかりのやさしさの風景であった。世の中捨てたもんじゃない。優しさが社会システムの中に組み込まれている。社会システムとして当然のように処理されていることが実はやさしさにあふれていることでもある。当たり前には享受できてしまうと当たり前になってしまって感動もなにもなくなってしまうけれども、実は本当に慈愛に満ちたものであったりする。国民健康保険もそうだし、子供の医療費無償化や教育費無償化への動きもそうだし、世の中の社会福祉システム全体もそうであったりする。言葉にしてしまうと無味乾燥で感動もなにもなくなってしまうのであるが、よくよく考えてみると壮大な善意の表れである。あって当たり前の人間にとって必要不可欠な空気さえ、人間は普段の生活の中で忘れてしまう。意識しない。自由や平等、平和といったものも同様かもしれない。意識しない。みんな忘れている。当たり前にあるものに対して人間は無関心になってしまう。

不自由で不平等な現実の中で、自由で平等という価値を見出し、その達成を目指す社会システムを作り上げるということは並大抵のことではない。

歴史を見ればわかる通り、残虐な殺し合いばかりしている人間が、平和な時を継続させることについてどれほど稀有で貴重なことであるのか身に染みて感じる。

私たち人間は、大切なものを失わないと、その大切さがわからないという、相当な欠陥を持ち合わせている。忘れないようにしよう。忘れ物は、いまのところ戻ってきているが、戻ってくると保障されたものではない。大事なことが、いつもあるということが豊かなことということであれば、相当な健忘症である人類は、大事なものを大事だとしっかりと言いつけることが必要だ。

自分の記憶力がどうだかというとなんか悪くはないほうだとは思っているけれども、集中しすぎるとその他のものを一切忘れてしまう傾向がある。物思いにふけるとか、考え込んでいるときには他のことが聞こえていなかったりすることがある。テレビに集中しすぎて話しかけられてもまったく反応せず家族に人の話を聞いてないといわれいららさせてしまうこともたびたびある。

また、情報処理能力の話にもなるかもしれないけど、仕事などでいくつもの業務を並行して行わなければならないときは、あっちをやって、こっちをやると、その次、あっちをやることを忘れてしまったりするので、仕事の時は、毎日、to do リストや備忘録を常に作っている。人間、そんなに同時に10個も20個ものことをやれるものではないので、これは絶対にやっておくべきで、ビジネスマンとして身に付けておく所作だと思っている。

たまに記憶力の良い人がいて、一度、読んだものは、絶対に忘れないという人がたま

にいる。テキストをばらっと読んで公務員試験に合格してしまう人もいる。他の人は公務員試験対策の専門学校へ通ってようやく合格できるというのにえらい違いである。そういう人はわからないけど、だいたい人間は、公私に渡って全方位的にすべてのことについて記憶するのは難しく、ある特定の視野において集中しており、その他については記憶喪失になっているも同然かもしれない。人間の興味範囲というのは様々だ。

人間の幸せは、結局のところ近くにある。すべてを有難いと感じられるなら、それは幸せそのもので、身近にあるものが幸せだとわからないのは、気がそちらに行っていないため、そこにそれがあることが稀有なことだ素晴らしいことだとわからないのは、そちらに目をむけてないからである。そういう意味では人間、誰しも忘れてのことだらけである。ひどい忘れんぼは、治しようがない。

～ 平和 ～

2022年2月、ロシアがウクライナへ軍事侵攻した。この21世紀にこのような蛮行が再び現実のものとなり平和な日々が脅かされる事態となってしまった。人間の2面性の悪い部分が白日の下に照らされ見たくもない情景や話が飛び込んでくる。失望以外にもものでもない。人殺しを正当化するためのロジックはなにも心に響かない。ロシア人保護のための自衛の戦争など侵略を侵略でないと思い込ませようと必至に自己催眠を行おうとしている悲惨な可哀想な人たちの口から出た言葉である。作られた物語に飲み込まれて、自らを失い漂流している。戦争は人間の文化的生活を全否定する暴力的なあるまじき行為の集大成といえる低俗な行為で、日々の丁寧な繊細な行い、優しさ、心を尽くした積み重ねを、まるでなかったように破壊し踏みにじり愚弄する。あなたはそれをしていったい何を残したいのでしょうか。戦争に加担しないで。言葉でいいたくもないような蛮行により恐怖で震えあがらせて戦意喪失させようとするが、そのような行為は結局は自らを低めるばかりでなんら目的は達成されるものではない。人が全労力をかけて一生懸命作った美しい街並みや建物、人々の営みを見るも無残な姿へと変貌させ、むちゃくちゃにして喜び感覚が麻痺した狂った人でなしの獣たちは、なにをなそうとしているか。戦争は、脅して、戦慄させ、とことんまで殺戮して、破壊しつくして、非戦闘員までも殺し、恐怖を植え込み、反撃を行う気にもならないくらいの地獄を味あわせようとする悪趣味の極致へと必ず到達する。人道的な戦争などない。嘘をつき、フェイクニュースを流し、ニセ旗作戦の挙行し、姑息な手段を用いる。だいたい、破壊つくされた街にどれだけの価値があるのか。恨みを持たれた人々と何ができるのか。これからは不理解と困難だけが続くだけで、物的にも人的にも何も得られない。財産を破壊して追い詰めて未来永劫の禍根を残し何ができるというのか。戦争ほど命が軽んぜられ状況はない。ある日、突然、人の営みを奪うわけだ。赤ん坊で生まれて、親に手間暇、愛情を注がれて育ち、学習して、色々な人々に囲まれ、親友がいて、仲間がいて、仕事をして、世の中の役に立って、また、家族を持って、懸命に育てて、そういった大事に、大事にされて生きてきた人々の命を、簡単に奪い、抹殺してしまう。そこまで、まったく今までの営みがなかったかのように断ち切ってしまう。いったい全体なにをしているというのか。マンションにミサイルをぶちこんで何をしているというのか。病院にミサイルを撃ち込んで何をしているというのか。避難場所にミサイルを打ち込んで何をしているというのか。このあと、どうなるのか想像がつかないのであろうか。大量の負の感情しか残らない。恨みと復讐心しか芽生えない。

いったい何がしたいのか。ひとりが死ねば、その周りの数十人の心が死ぬ。とつてもとつても大きな空隙が開く。とつてもとつても大きな喪失感がやってくる。そうなるの

がわかっているのにどうしてそのような行為をしようと思うのか。戦争に加担してはならない。殺戮に手を染めてはならない。正義の戦争などなく、戦略がうまくいかないときは、その行為の残虐さはエスカレートしていく。行きつくところは女性や子供、高齢者まで殺す。虐殺を浄化と言ったりフェイクと言ったり頭がいかれている。正当化するために嘘を塗り重ね、すりこみを行き届かせる姿はみすばらしい。

そして、フェイクの伝説は、どこまでもいつまでも、はびこり、しくこいぐらいにこぶりつく。

追い詰められるなら人間はなんでもやってしまう。追い詰められていることが常態化するなら、なんでもやってしまうことも常態化してしまう。その習慣を身に着けたものは、ずっと、その習慣で居続ける。壊したものが何かもわからずに、想像すらもできない。ロシア人にトルストイの「人間には多くの土地が入用か」を読ませてやりたい。生き方を間違えてはならない。彼の地では、甘露の雨は降らない。

「罪」は、ギリシャ語で「的外れ」を意味する。「罪」とは「的外れ」のことをいう。的外れな生き方をしていないか。

忘れられたお話が戻ってきた。

口の狭い壺に入ったオレンジを取ろうと猿は執着して、何度も取ろうとするが、一向に取れず、そうしているうちに、狩人の網に捕えられてしまった。

こういった話はちゃんと覚えておくべきである。

～ 目的地 ～

以前働いていた会社での話だが、とある日、上司と地方のひなびた駅で、なかなか来ない電車を、ホームのベンチに腰掛けて待っていた。都会のように不要な音もなく、小鳥のさえずりが聞こえ、陽気のよいおだやかな日のことであった。

「無事は名馬って知っている？」

上司が突然訊いてきた。

「うーん。訊いたことはありますが、正確な意味はよくわかりません」

上司は会社のメインバンクから来た人であった。

「僕もね。若いころ自動車事故にあって腰を痛めたことがあるんだよ」

「はい」

「で、今、古傷が痛んでね。しばらく入院することになっている」

「そうなんですか。えっ、ぜんぜん知りませんでした。腰はどんな具合なんですか」

急にこれから入院するといわれ、戸惑いもあったが、上司に対しては完璧な仕事で大方片付いており、急にいなくなっても、仕事上は、大した影響はないと、とっさに思った。ただ、これまでの経緯等わかってもらえる人がいなくなってしまう残念でもあるし、それに、課題に対して一緒に取り組み、その上司から賞賛されていたので、もう少し一緒に仕事をしたいとも思っていた。相性のよい上司などそう出会えるものでもなく、これからもあると思っていた上司であった。

「ああ、そうだったの。知らなかったの」

入院後は、銀行に帰る、もしくは、別のところへ行く人だ。

「知りませんでした」

「まあ、突然かもしれないけど、腰の痛みがひどくてね。今も鎮痛剤を飲んでいるんだよ。

医者に、一度、入院したほうがよいといわれてね。まあ、ゆっくり休んで、しばらく治療に専念する」

「大事にしたほうがよいですよ」

「無事は名馬ってのはね。いくら優秀な名馬でも、目的地に着かなかったら駄馬よりも役に立たないって話。いろいろダメなところあっても、最終的に目的に達する馬が名馬という話」

「なるほど、そうですか」

自分の腰痛に対して、複雑な感情を抱いていたことは確かだと思ったので、あまり、詮索せずに、あとは、自分が背中をつったとき話をしたりした。

それにしても、上司にとっての目的地とは、なんなのか、少し気になった。単純に出世街道の目的地のことを言っていたのであろうか。今となっては訊くすべもない。

自分の目的地はどこか。ぼんやり考える。無意識に自覚しているところもあるが、あえて、具体的な設定をしていない。もちろん、日々の目標は細かく設定してある。今まで、紆余曲折、いろいろなところを見て歩いてきて半世紀がたつ。足跡から望んでいるものが、浮かび上がってくるものもある。自分の目的地はどうか。また、自問自答してみる。

遠くへ行って、また、戻る。遠くへ行って、また、戻る。遠くへ行って、また、更に遠くへは行ってほしくない。帰ってきて、帰ってきて、すべて、もとへ帰ってきて、今の幸せが、今の幸せは、いつまでも、離れないで、どうか、どうか、落とさないでくれ。

もし、なにかあったら、戻れなくなるかもしれない。存在が削られることは、自分も一緒に削られる。愛する人々が削られるなら、自分も一緒に削られる。だから、離れないで、だから、もう、どこにも行かないでくれ。だから、もう、今の幸せが、一生続いてほしい。

目的地、たいそうなことを考えなくてもいい。もう、到達している。この今の時、今の場所、今の瞬間、いろいろあるけど、素晴らしい。そこを十分堪能する。そういう気持ちになってくる。過去に多く自己実現を成し遂げてきた。同じことをしようとは思わない。本質的に必要なことをしたい。

そういう満足している人を揺さぶりたい人たちもいるが、調子を合わせているだけでいい。彼らは救いようのない人たちで、彼らは彼らの習慣に従い、いつまでもどこまでもやり続ける。やりたいのであれば、一生やっていけばいい。それが彼らの自己満足であり自己実現なのだから。止めはしないが、あまり必要以上巻き込まず、淡々とやってもらったらい。

～ 金儲け ～

子供の発達には、数多くのステップとプロセスがある。幼児においては、言葉の習得の段階で、例えば2文字目と3文字目などが入れ替わって発音してしまう現象が見られる。「エレベーター」を「エベレーター」、「ドロボー」を「ドボロー」、「せんぷうき」を「せんくーピー」、「ボルタリング」を「ボルタングリ」、「かしこまりました」を「かしこりました」、「じどうはんばいき」を「じどうふあいふあいき」。4歳児、5歳児の言葉である。間違いを犯す傾向みたいなものがある。習得するにあたってそのような道をたどる傾向のようなものがあると思う。

成長の過程で間違いを犯すもの。間違いではなく、習得する過程そのものともいえる。成長というのは、人間としての成長、経済的動物としての成長、スポーツ選手としての成長、教師としての成長、社会人としての成長、霊的な成長、経営者としての成長、いろいろな成長がある。その中に傾向というものが必ずあると思う。

いやらしいと思っているのは、経済成長のための人の成長という話で、そういう話をされると非常に違和感を覚えてならない。人は変われる。変わっていかねばならない。いつでも成長できる。あきらめた時に成長は止まる。成長のために成長しろと説かれ、目的が成長となってしまって、成長しろ成長しろと催眠術を掛けられているようである。そんな会社の研修もあつたりする。満足するなど。その先を行け。期待をさらに上回れ。そこに感動がある。現状否定して、どこかへ連れて行こうとするが、そうはいかない。幸せだと思っているのに、それは幸せではないといわれて、別の方向へ連れていこうとされるのである。厚かましいのにもほどがある。別に変化を拒んでいるわけではない。文脈や言い方、モチベーションが大事だと言っているのだ。「生かさず殺さず」という言葉があるが、会社経営というのはそのような面もある。今も昔も変わらない。過去の統治者もそうやって国を治めてきていたということもある。労働環境の改善や、人権の尊重、パワハラ撲滅、SDGs等いろいろあるが、会社経営の本質は、経済的合理性の追求に尽きる。そこへ収斂して、そこへもっていこうとする。本質は経済的合理性ではあるが、そこだけ見ているのは事業継続しない。どこかに無理がたたって、従業員に負荷がかかってしまえば継続しないし、環境に負荷をかけてしまっても継続しない。社会的影響もあるのでよき存在でなければならない。要は、人への影響、環境への影響、社会への影響を考えなければ、事業継続性はないということだ。

批判的にいおうとすれば、いくらでもいえるのであるが、それは、一側面だけを見ているということにもなる。つまり、半分、忘れていますよということになる。自分も気を付けないといけないと思っている。金儲けは必要で面白いことではあるが、それだけが目的となってしまうと、生き方に悪影響を及ぼす。金のことばかり考えていては、不幸になるというものだ。けど、しっかり肯定的にとらえて考えてみると、よい面も多分にある。金儲け＝経済優先と捉えると、これは案外、よいことなのかなとも思える。資本主義／自由主義の経済下において、公平性を担保する一定のルールを守っての競争が促されれば、人々は物的にどんどん豊かになる。経済は新たな価値を求めるので、固定化された世界に留まらず、流動的で、いろいろなものが混ざり合うほうを好み、平和な状態を希求し、人々が混ざり合い、自由に行き交い、物が国境を越えて行きかうほうを望む。豊かになれるように、そのことに専心するので、平和的な活動が活発になる。経済は、ある意味、平和を求める側面もある。みんなが、金儲けを平和的に考えれば、戦争のことを考える暇もなくなる。

まあ、ところが現実には、そんなことでもない、自由な競争を促す公平な一定のルールがあったとしても、利権が生まれ、格差が生まれ、支配されるものとそうではないものが生まれて、やがては武力での解決に頼らざるを得ないことになっているのも現実である。

本当は、自分の仕事に専心して戦争のことを考えることもない状態がベストであり、戦争をするより金策に励むほうが平和的で、極端な話、詐欺が横行したとしても戦争に専念するよりは平和的なことかもしれない。（詐欺を肯定する気はさらさらないが）

経済、文化を破壊するだけで戦争ほど無意味なことはない。昔は何もない山や川や農地を奪い合って戦争をしていたが、現代は土地の上にかかなりのインフラと建物や都市などの財産があって、それを破壊してようやく土地を奪うのであるから、結局、財産をぶっ壊して、価値がゼロとなったものを奪うので、なにをしているのやらばかげた話になっている。人々もSNSが発達して世界中の人々とつながっているため容易には服従しないし、恨みを買った人たちと何ができるのか考えないのであろうか。

一方、経済は、人にご飯を食べさせ、生きる希望も与える。不景気になれば自殺者数が増加するが、景気がよくなると減少することを考えると、経済が、いかに私たちの命を救っているのかということもわかる。戦争は人々に犠牲をしいて、経済は人々を救っている。

経済を下支えする個々人の仕事は、個々人に自己実現の機会を提供して、多くの人と接する場や、出張などで遠くの場所へ行ける機会や、達成感を共有できる仲間を与え、人生に多くの喜びと貴重な経験をもたらしてくれる。

軍事のことを考え出すと、戦略など準備などで、そのことばかり専心することになり、一時も休まることはない。一つ動けば緊張が生じ、エスカレーションする。そういうことはできるだけさせないためにも、仕事のことだけに専心できる世の中づくりもひとつに重要なことだと思う。誰もが仕事をもって食べられて、格差が少ない世の中にする方向へと向かって行ってほしい。自立して仕事ができるしくみづくりということも平和的な社会をつくるひとつの対策だと思う。

かつては経済的動物という、さげすむ言葉として使われたが、ここまで話を進めると、人々のお腹を満たし、希望を与え、平和を希求するすばらしい生き物と聞こえてくるような気がする。無論、一側面ではあるが、肯定的な気分となってくる。まさに「経世済民」である。

ものごとには2面性があって、こっちの話をしていると、あっちの話を忘れてしまつて、あっちの話をしていると、こっちの話を忘れてしまう。そんなものかもしれない。

～ 足るを知る ～

「足るを知る」それが分かれば、君は幸せだ。だけど、片方で、欲望を掻き立てる装置が常に稼働している。貪欲にフロンティアを目指して、人々に刺激を与え、感動を与え、驚きを与え、熱狂させようとしている。求めてもないのに、これはどうですか？ と扉をノックしてくる。その先を見せてくれる。欲望が解放されていく。そうすると「足るを知る」ことがどんどんわからなくなる。欲望を満たすことの果てしない習慣が身につけてくる。うまくいけば君は幸せだ。さあ、どちらを選ぼうか。

忘れものは必ず戻ってくる。君が忘れものだと思って、取り戻そうとするなら、必ず戻ってくる。今までと反対側を見つめるようにするなら、必ず戻ってくる。戻ってくるのは社会の善意の営みによるものかもしれない。夢や希望が持てる社会だからかもしれない。2つは1つだからかもしれない。

エチオピア産のコーヒー豆を挽いて、妻に買ってもらったサイフォン式コーヒーメーカーでコーヒーを淹れる。香ばしい香りに包まれる。私が頼んだわけでもないのに、誰かが船を使ってエチオピアからコーヒー豆を運び、スーパーの陳列棚に誰かがおいて、それを私が探しあてて、自宅でサイフォン式のコーヒーメーカーでコーヒーを飲む。

それから、まわりにあっていいなど思うもの。絵だったり、音楽だったりする。世に数多い画家の絵を貸し出すサービスを利用している。自分の気に入った絵を選んで郵送で送ってもらって自分の家の壁に飾ることができる。時間がたって別の絵と取り換えたくなったら、新たな絵を取り寄せて、家にあった借りた絵を返送する。絵にはいろいろな種類がある。抽象的な絵、街の風景を描いたもの、自然を描いたもの、季節のものを描いたもの。季節が変わると、今まで掛けていた絵が、どうも雰囲気があわなくなると絵を変えたい。自分の選ぶ絵は季節と密接に関係があるように思っている。春は、あたたかな雰囲気でピンクっぽい色彩のもの。夏は、海や空を描いた青い色彩のもの、秋は、紅葉や森の豊かさを描いた緑や黄色や赤の入ったやさしい山の秋の色、冬は、クリスマスの雰囲気のあるもの、夢のあるもの、水や雪のイメージがするもの。街の風景画は訪れたことがある街であれば記憶が蘇るものもあり、訪れたことがないところのものであれば、想像を掻き立てるものになる。玄関に飾ってあるので、まっさきに目に飛び込んでくる。

音楽はその時の雰囲気や時代を想起させるし、個人的な感情も彩り鮮やかに蘇らせる。好きな曲はどんな形であれストックして、いつも感じていたい。忙しさに音楽を聴く時

間さえもとれないときに、ぱっと昔の音楽を聴いて心酔するときなど、聴かなかった時間をなんともったいないことをしていたものかと痛感する時もある。いつも音楽に触れていたい。

身近な希望がある。

仕事では、自己実現するとか、目標達成して仲間と歓喜するとか、よりよい雰囲気の仕事ができてより豊かな時間を過ごしたいし、家庭では、愛する家族と一緒に過ごせて、日々のなんでもない時間を共有しながら、子供の成長に一喜一憂して、ああでもないこうでもないと思ひながら楽しみながら、同じ時間、同じ場所を共に過ごして、降り積もるあたたかな時の流れの中で過ごしていきたい。そういう時間が、壺の中のものに気を取られて遂には自分の足元をすくわれてしまった猿のようにならないように、しっかりと常に身の回りがあるようにそういった環境を作り出すように努めて生きていきたいと思う。

とはいっても人は、どんなに優雅にみえても、どんな立場や状況にあっても懸命になにかと対峙しているもので、ゆったりと湖面に浮く水鳥と同様、水面下では、せわしなく足をバタバタさせている。人はそうした中で、幸せな時間をできるだけ多くとろうとしているし、幸せを感じられるよう希望している。とれるときはできるだけとってしまうのも手だし、緩急つけて、より印象を強めるというのも手だし、好きなものを常に自分の近くにおいて過ごすのもいい。自分のあるべき姿やスタイルを明確にして、それにできるだけ近づけるようにどうすればできるかと考えて行動できるのであれば、それはベストだ。楽園をイメージして、その中に自分を住まわせてやれるかだ。自分が真に幸せになることに遠慮はいらない。それはみんなの幸せだ。

禍福は糾う縄のごとし

足るを知るためには、足らないことを経験しないと分からないこともある。

欠損と充溢。欠落と補充。不在と在。そこを通り幸せはより幸せになる。

事実はときに複雑だ。

そこを通らなければ、あちらにいけないということもある。

通らずして分かるならば、その人は恵まれている人だ。

産業が興れば、環境が破壊されて、環境保護運動が展開される。

戦争が勃発すれば、残虐さと人的被害が過酷になり、反戦運動が起きる。

そこは通りたくないが、アホで罪深い人間は、なんどもそこを通る。

只中にいると、只中以外わからなくなる。

やっぱり、人間は、まったくわかっていない。

人類の大問題を、歴史上、いまだ、解決したものはいない。

～ 人生と善 ～

人生は、幼少期の原体験や、学校で学んだ内容に大きく影響を受ける。

私の生まれた1973年という年は、オイルショックの年である。第四次中東で戦争が起こり、物価高になった。もちろん、そんなこと覚えてもいないし、成長してだいぶ後になって、そういう時に生まれたんだよと聞いただけの話だ。そして50年後の今、また、ロシアがウクライナに仕掛けた戦争で、人迷惑にも、また、物価高になっている。物流が滞り、生産が落ち込み、原材料が上がって、結果、商品の価格が高騰している。50年前の高騰は、高度経済成長で賃金も上がってなんとかバランス取れていたというが、今は賃金も上がらず、出費が増えるばかりで、人迷惑にもほどがある。大迷惑である。お隣の土地がほしいと独りよがりな思いにふけた妄想家が、半狂乱になって越境して完全な不法占拠をしでかしている。仲よく資源を分け分けして平和に過ごしていればいいのに、資源を人質にしてゆさぶりをかけたがため、世界の燃料費が高騰して、電気代金の異常な高騰へと帰結している始末で、誰も幸せになっていない。なんの得にもなっていない。戦争を始めた当事者も、人的物的経済的安全保障上も大損失を受けている。まるで、囲んだ分の遊牧民の土地が得られることになった男が、なるべく土地を多く囲もうと懸命に走って走って走った末に心臓発作を起こして絶命してしまったという話と同じように思えてならない。トルストイが書いた作品である。

1973年以降は、エネルギーのベストミックスが叫ばれるようになり、石油一辺倒ではなく、石炭、石油、LNG、水力、原子力などいろいろな電源を採用して、リスクを分散させて、なにかあっても影響を最小限にとどめられる体制を指向するようになった。2023年は、2011年の福島第一原子力発電所事故以降は最低限の水準で抑えられていた原子力について、この燃料高の影響を受けて、効果があるように見せかけてどさくさに紛れて、原子力の積極活用していく方向へ政策転換を図った。ひとたび事故が起これば大惨事になりうる原子力のリスクを抱えながら、生きるという道をまたもや選択している。政策の転換をしたとしても、直近の電力の高騰を抑えるだけの効果はまったくないにも関わらずである。さらに長期的にも、原子力は以前のように低コストでというわけにもいかず、様々な安全対策を行うことを考えると、決して安価な電源ではない。今現状の電力高騰に策がないことにさらに無策を重ね塗するようなものである。放射性廃棄物の処理についても依然として見通しの立たないままである。ひどい健忘症である。未来の子供たちにごみを押し付けているわけだ。

そういう意味でもロシアは、日本のエネルギー政策にかなり余計なことをした。結果的に、日本にリスクを抱え込ますような決断を促したことになる。

さて、私の人生に影響を与えた原体験についてだが、幼少期から10代にわたって、継続的にある刺激に触れてきたように思える。当時のアニメにも色濃く出ていると思うし、

実際、社会問題にもなってニュースにも数多く取り上げられていたし、映画作品にもメッセージとして表現されていたものである。「巨人の星」「明日のジョー」「ド根性がえる」などに描かれる都市の風景には、工業化によってもたらされた大気汚染や水質汚染などの環境汚染の現場が描かれており、生活環境が奪われた憤りみたいなものが表現されていた。技術を持ち合わせた人間は過信して大きな力を得たが、自然から大きなしっぺ返しを被るとか、アニメ映画にもそういったメッセージ性があるものが多くあった。また、身近な環境においても、手賀沼は生活排水が流れ込み日本一水質が悪化した湖であったし、実際に行くと思臭を放っていた。テレビを見れば、もうもうとした煙がでている工業地帯の風景が映し出され、住民は公害に苦しんでいるといったニュースが流れていたり、高校生の時には、ブナ林が酸性雨によって枯死しているというルポタージュを読んだりして憤ったりしていた。いつしか、工業化による環境破壊というものが、ひどく忌むべきものとして感じられ、なんとかそれを改善したいというような思いを持つようになっていた。

また、同時に、高度経済成長期にできた突貫工事で作ったような醜悪な建物、例えば、鉄筋コンクリート造で柱と梁でこぼこしたところに、安価な材質で塗装したような建物が数多くあり、見るたびに、もうちょっときれいな建物のほうがよいなと子供ながらにも思うことが多くあった。

そう考えると、公的な空間や環境がきれいになってほしいという気持ちが芽生えたというか、なんとかならないのかということをよく考えることがあった。そういう日々の伝えられるものに敏感に反応して、環境意識というものが高まっていったように思われる。

また、時代というところかというと、脱線かもしれないが、1980年代はバブル期に突入する一方で、長時間労働による過労死ということが問題になっており、労働に対する考え方も、なんとなく負のイメージが、まわりついていることも否めない。総じていうと、バブル期のよい匂いを嗅いでいるが、そこに飛びつくといよりは、工業化や高度経済成長の負の面に敏感に反応して、正義感を燃やして、立ち向かうんだ、直していくんだという面が強かったように思う。

大学は建築学科の都市計画研究室で学んだ。公共空間がきれいになってほしいという漠然とした希望があって、その道を選んだわけだが、時代は1990年代。バブルがはじけて、日本経済は急激に元気がなくなり、都市の不動産は不良債権化して、今後、数十年は大規模な都市開発は行われないと断言されていた。これからは既成市街地のまちづくりがずっと続く。そのためには住民の合意形成が重要になる。住民発意のまちづくりこそ、ち密な設計、ニーズをとらえた設計、その土地の特徴を生かした設計へとつながる。住民参加こそまちづくりのあるべき一つの姿だ。そんな風な価値観がインプットされたと思う。

事実、日本のまちづくりは、環境改善運動や、乱開発反対運動、歴史的景観保全運動、中心市街地活性化など地域の発意により、社会問題の解決、地域の実情にあった公共空間のち密な改善が行われてきている。そういった場では、コミュニティがあり、生活の質までも改善されて、生き生きとした生活が待っているという憧憬までも育んでいたかもしれない。まさに、労働に追われてない、本当の意味での豊かさがあるという具合に。

そう考えると、近代化のアンチテーゼの中を疾走したいといった衝動が心の中を漂っ

ているように思えてならない。

しかし、完全なまでのアンチテーゼを体現している生き方をしているかというところではない。どちらかというところ、現体制下の中に安住していたと思う。ただ、既存の考え方を正してやろうと思いがどこかにあったように思える。全体的に成功しているかというところはよくわからない。ただ、微力ではあるが、ある価値に向かってできることはやってきたと思っている。

私の今の目標は、脱炭素社会の実現である。私はこれを必要だと思っている。

人間の産業化により空気中の二酸化炭素が、産業革命以降、増え続け、地球温暖化が促進され、地球上の各所で異常気象等の様々な気候変動が起きている。今までに起こりえないような大雨、大雪、竜巻、洪水、崖の崩落、台風による突風などを伴う激甚災害が頻繁に発生、また、急激な気候の変動で渇水の継続により、局所的に食糧生産量が減少することや、異常高温が継続して、熱中症など多発、健康被害が増加して、また、大規模な山火事が発生、水位の上昇による居住地域の破壊、国土の減少など自然環境、人間の生活環境、または文化までもが大きく破壊されるなど、このまま進めば、世界秩序が大きく棄損される事態まで進展してしまう。極端に言うと、住む場所を追われ、食べるものも食べられなくなり、恒常的に激甚災害に遭遇する世界に住むはめになる。

人口が膨れ上がり、より多くの人々が、より豊かな生活を求めるとすると、さらに地球温暖化は進展する。食糧生産の分布にも変化が生じ、全人口を支える食料の確保が問題になってくる。

人間は過酷な環境でも生き延びるかもしれない。けれども、よい環境があるのであれば、それを子供たちに引き継いで、その子供たちも当然のようにその恩恵を得られるようにするのが、先に生きるものの努めだと思う。自分の子供に過酷な環境をプレゼントしたい親がどこにいるであろうか。将来世代へ我々世代の善意を届けなければならない。未来も善意に満ちた世の中になってほしい。子供たちは、人間のきらきら光る善意の中にいてほしい。しっかりとそういうシステムが作動する世の中であってほしい。だから、我々も善意に基づいた行動をとる必要がある。

太陽光発電所などの再生可能エネルギーは、実は、2011年以前の電力システムにはなじまないということを知っている人は数少ない。従来の火力発電所などの大規模電源のシステムと、小さな容量の太陽光発電所がたくさんあるシステムは、基本的には状況が大きく異なる。大規模電源のシステムは、例えば、50万kW級の発電所から末端へ電力を流すのであるが、分電型電源のシステムでは、末端のほうにも発電所ができて、いろいろな箇所から電気が流されるので、末端のほうの系統を増容量してやらないといけない状況が発生する。

また、太陽光発電所や風力発電所は、自然条件によって発電量も変化する。そこが一番大きくシステムに影響を与えるところである。周波数を維持するために電力の使用量と発電する量を同時刻に同じにすることが求められる。もちろん、大規模電源だけのシ

システムでも同様に求められていたが、発電量をコントロールできるというところから、需要が減れば、火力発電所へ指令を出して発電量を減らしたりとかして調整するだけで済んでいたが、太陽光発電所の発電量は、日照によって変化するので、それを予測して発電量を計画する必要性が生じて、その予測ということが非常に重要な行為となってきているのである。自然相手に発電量を予測して、電力の需要量と供給量を合わせに行くという行為をどうするのかというところのしくみづくりが非常に大事になってきているのである。

2011年の東日本大震災によって、福島第一原子力発電所が壊滅的な被害にあって、2011年以降、原発利用が低く抑えられ、変わりに再生可能エネルギーの利用が促されるような施策や目標が設定されるようになった。電力システムというところから、目指すところのあり様が、2011年以前と2011年以降では、大きく転換された。

私も2011年以前は、電力会社に所属しており、そのときには、太陽光発電設備は、システムに悪さをするから、あまり多くの導入を進められない。あんなものは、PRにすぎないといわれていた。その意味は、今となってはわかるが、その当時は、なんとなく追及もせずにそういうものなんだろうという認識にとどまっていた。2011年の直前の状況は、原子力発電は二酸化炭素を排出しない電源で、安全神話がまことしやかにささやかれ、コストも安いということで、全世界に技術を広めていこうというぐらゐの勢いがあったのであるから、再生可能エネルギーのことなど、あまり意識されないものであったのも事実である。

私の原子力のイメージであるが、2002年の柏崎刈羽原子力発電所の点検記録改ざん事件や、2007年の新潟中越沖地震での柏崎刈羽原子力発電所の所内変圧器火災などにより、マスコミから批判され世の中から信用を失い、テレビ広告等の営業行為が制限を受けるなど、運用に難ありのやりづらゐ電源だという認識はあって、不祥事だけは起こしてくれるなという気持ちであったところに、2011年の福島第一原子力発電所の事故が発生した。

もう、いい加減にしてくれという気持ちと、自分では責任取れないことに加担することはできないという気持ちと、また、二度とあのような人災を起こしてはならないという気持ちがあって、2011年以降は、再生可能エネルギーの会社に就職して専念するということになった。

2012年には再生可能エネルギーの固定価格買取制度が施行され、それ以降、多くの太陽光発電所が全国各地に計画され、運用されるようになったのである。当然、手法の確立されていない事業には、既存電力会社は手を出すはずもなく、発電事業をしたこともないような事業者が一攫千金を求めて新規事業として取り組む状況が数多く見受けられ、全国に太陽光発電事業のスタートアップ企業がわんさかと現れた。まさに再エネ大航海時代の幕開けであった。

その後、10年たった今、再生可能エネルギーは、0%から20%ほどまで増加して、多くの再生可能エネルギー発電所が全国に展開されている。

その過程では、制度的な未熟さと新たに参入した事業者のノウハウ不足などにより不適切な事例も散見され、その後、慎重さが増し規制的な側面での法整備も一方で進んでいる。

再生可能エネルギーは太陽光発電所だけでなく、バイオマス発電所、地熱、陸上風力、

洋上風力とその種類も多岐にわたる。2021年には日本は2050年にはカーボンニュートラルを達成する方針を決定、これまで以上に再生可能エネルギーの必要性が増している。

ここまで振り返ってみてみると、忘れ物は必ず帰ってくると思えて仕方がない。個々人の動機がどうであれ、世の中は善意で満ちている。猪突猛進で工業化を進めていた人間は、CO₂を増やしすぎてはいけないという側面が実際見えずに、感覚的にはわかってはいたはずであるが見落としていて、重要性を忘れていたけれども、きっちり思い出してそれを取り返そうと取り組んでいる。

だいじょうぶだ。あなたの忘れ物も絶対にも戻ってくる。いつか気づいて戻ってくる。それに気づくときがある。それは必ず戻ってくる。

よいもわるいもやさしくあらいながしてくれる。きれいなものよごれたもの。うつくしいものきたないもの。入り交じり大きな川となってながれていく。よいもわるいもやさしくあらいながしてくれる。それがそこにあって当然かのように過去のことはあらいながしてくれる。なにごともしなかったようにながれていく。少しだけ覚えていても忘れていく。よいもわるいも忘れていく。みんなにも覚えちゃいない。みんなにも覚えちゃいない。だけど大事なものは戻ってくる。

世の中は善でしか進みようがない。世の中の骨格は善意でできている。陰謀も何も無い。人の本質は善だから、悪ということはない。善意の骨格の中で悪意がうろうろしているだけで、短期的に悪意はヒステリックに支持されることもあるかもしれないが長期的には継続しない。悪意が本質ならとっくの昔に人間なんか終わっている。みんながここにあるということは、人間の本質が善である証拠である。善意というものが確かにあって、その営みは消えることはなく、むしろ、そちらのほうが人類の本質だと思えてくる。

忘れ物をすると、こんなプロセスを辿る。まず、人のせいにしたがる。失くした影響の大きさを想像して蒼白になる。どこで失くしたのか高速回転でくまなく記憶を辿ろうとする。可能性のあるところに、とにかく早く電話を入れて気を落ち着かせたくなる。忘れ物があるかないか訊いて回答を待っているときに深い祈りがある。あった時の安堵感は天を突き抜けるほどで、世の中に感謝する気持ちが湧き出てくる。いつもと違うふうには周囲がキラキラと輝いて見える。いままで当たり前であったことが奇跡に感じる。自分の人生までもさかのぼり、そこに人間の善意までも見つけてしまう。忘れ物の効用と言うものだろうか。周囲を見渡し、いろいろなものを見つけ出し、人生までもさかのぼってしまった。たまには忘れ物をするのもよいかもしれない。いやいや、出てくるか分からないので、やっぱり忘れ物はしたくはない。忘れ物は戻ってくる。

了

忘れ物は戻ってくる

著 池田真哉

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
